

# 当事者研究はどのような知識を探求するのか

熊谷 晋一郎 (Shinichiro Kumagaya)

東京大学先端科学技術研究センター

## 当事者研究の3つの側面——自助的支援、研究、運動

当事者研究とは、「障害、依存症、貧困、被災、子育て、介護など、様々な困難を抱えた当事者が、自らの困難の解釈や対処を専門家に丸投げするのではなく、自ら引き受けるべき研究対象として捉えなおし、類似した困難を持つ仲間とともに、経験を言語化し、困難の解釈や対処法を探求する取り組み」である。もともとは、北海道浦河町にある精神障害者らの地域生活拠点である「浦河べてるの家」で、重度精神障害者の就労や起業などを進める中で、新しい自助的な支援技法として編み出されてきたが、その後、他の困難の領域にも広がっていった。

当事者研究は、何らかの生きやすさを目指す自助的な支援技法であるだけでなく、専門家や支援者では気が付きにくい当事者視点で新しい知識を生み出す研究技法としても注目されている。具体的には、2012～2017年新学術領域研究、2016～2022年CREST、2021～2026年学術変革領域研究、2021～2026年CRESTをはじめ、当事者研究から導かれた新しい仮説を検証したり、当事者研究が当事者本人や組織・コミュニティに与える影響を検証したりするため、医学、心理学、神経科学、社会学、人類学、哲学、経済学、ロボティクスなど、多様なディシプリンと連携する研究プロジェクトが進んでいる。こうした実績を背景に、東京大学においても当事者研究の研究的な側面を推進するため、2015年には、東京大学先端科学技術研究センターに当事者研究分野が設置され、2018年には、障害のある当事者の視点から研究活動をする「ユーザーリサーチャー」というポストが東京大学に設置された。

さらに、当事者研究は、多くの自助活動と異なり、研究成果を書籍や論考、口頭発表やポスター発表、展示などの形で公開することが多い。それによって、困難に対する地域社会の理解を促進させる社会変革的な運動技法の側面も、当事者研究にはある。

## 当事者研究が探求する知識のタイプとその真実性を維持する機構

このように当事者研究には、支援技法、研究技法、運動技法という3つの側面があるが、本発表ではそのうち、研究技法の側面について論じる。とりわけ、当事者研究がどのようなタイプの知識を探求しているのかについて考える。

当事者研究は自分についての知識を研究する取り組みである。では、自分自身の何を研究しているのだろうか。我々は、当事者研究を長年実践してきた浦河べてるの家や、ダルク女性ハウスに関する歴史研究、実践場面の参与観察、具体的な当事者研究のレビューを行う中で、当事者研究が探求の対象とする自分についての知識は、大きく2つのタイプに分けられるのではないかと理論化してきた。

1つ目のタイプは、自分の感じ方、考え方、行動の仕方の癖やパターンなど、「**時間を超えて変わらない、一人の私として共通している自分 (sense of invariant self)**」

である。過去の具体的なエピソードを並べたときに浮かび上がってくる、「あの時もこうだった」「この時もこうだった」というパターンに関する知識である。加えて、パターンのうちで変えられるものと変えられないものを、日常生活の実験を通じて不断に見分けようとし、自分の変えられない部分については周囲の環境の変化を提案していく。2 つ目のタイプは「**時間とともに変わり続けているが、一人の私として連続している自分 (autobiographical self)**」である。こちらは、個別のエピソードを一度きりのできごとと捉えた上で、それらを連ねた自分史を編み上げてできる知識である。自分史として編み上げられた全体的な文脈に個々のエピソードを位置づけることで、各々の出来事の意味が与えられる。

自分に関するこうした知識については、自伝的記憶（あるいは自伝的知識基盤）という概念のもとで、先行研究の蓄積がある。自伝的記憶研究を専門にするコンウェイは、脳神経系には、自分に関する信念をなるべく真実に近づけるための、互いに拮抗する複数の機構が備わっていると考えた。1 つ目は、新しい信念が既存の信念体系と整合的かどうかをモニターする機構である（コンウェイは、真理論で言う整合説に対応付けている）。2 つ目は、感覚入力や運動出力と一致ないし対応している信念になっているかどうかをモニターする機構である（コンウェイは、対応説に対応付けている）。3 つ目は、生きる上で実用的な信念になっているかどうかをモニターする機構である（コンウェイは整合説に対応付けているが有用説ともみなせる）。さらに、当事者研究では、他者とのやり取りを通じた目的や信念の共有と更新も重視されており、演者は、模倣、共同注意、共同行為、メンタライジングといった 4 つ目の機構も当事者研究において重要な役割を担っていると考えている（合意説に対応付けられるかもしれない）。

#### **自分に関する知識の真実性と精神的不調**

しかし上記 4 つの機構は、同一の信念に対し、それが真実かどうかを判断するにあたって、別の解釈を行う可能性がある。例えば、既存の信念体系を大きく揺るがす新しい信念は、感覚入力と対応していても整合説の条件をにわかには満たさず、否認されるかもしれない。さらに、感覚・知覚・認知・運動などの観測器官の仕様が、多数派とは異なるマイノリティの場合、多数派の信念と自分の信念をすり合わせる事が困難になり、合意説が満たされにくい状況に置かれるかもしれない（当事者研究では、したがって、観測器官の仕様が互いに類似したマイノリティ同士の共同性を尊重する）。

コンウェイは、こうした様々な理由で自分についての信念が真実性を満たさなくなると、精神的な不調を起きると考えた。このことは、当事者研究が持つ、真実を求める研究技法としての側面と、生きやすさを求める支援技法としての側面が、内在的に関連し合っていることを示唆する。

#### **支援と研究を両立する当事者研究の方法**

以上の理論化をふまえつつ、演者らは、2 つのタイプの自分に関する知識を探求する方法を検討し、オリジナルのワークシートを開発した。また、こうして開発した方法が、生み出される自伝的記憶の真実性に関して 4 条件を満たすものになっているかどうかを間接的に表す尺度を測定するとともに、当事者にとっての生きやすさを表す尺度を測定している。そうすることで、研究技法としての側面と支援技法としての側面を両立させる当事者研究の実施方法を探求している。